

## 精神看護学ケースカンファレンスの会

Active Report of Case Conference among Psychiatric Nurses

森 千鶴

MORI Chizuru

### ・発会の趣旨

本学の修士課程には、精神看護学の専門看護師(CNS: Clinical Nurse Specialist)や実践看護師(NP: Nurse Practitioner)のコースはない。しかし、修士課程の修了生は、臨床の場では看護師としての高い能力も期待されるのではないと思われる。また看護師としての能力、すなわち、個々の患者に対する看護実践能力と看護研究能力、リーダーシップを発揮することである。このうち看護実践能力は、実践を積み重ねることが最も有効な方法であると思われるが、実践の基盤になるのが、一人一人の患者の状態を的確にアセスメントすることと、それに即した看護計画の立案である。そこで本会の当初の目的は、患者を理解し、的確なアセスメントをすること、および患者の状態に即した看護計画が立案できるようになることであった。そのため提示された患者をできるだけ的確に把握し、その人のQOL(Quality of Life)が少しでも向上するための看護計画を話し合うこととした。

### ・活動の趣旨

看護の質の向上を目指すのは、2つの側面からのアプローチがあると考えられる。1つは看護師が自分の看護のすずめかたを発見し、それを意識的に用いてより熟練した方法として看護体験を積み上げていく方法としての事例検討である。そしてもう1つは、自己の固定観念を排除し、患者をより的確に理解し、看護計画を見直すという方法である。

本会は実践における看護師の感情や思いを洞察し、看護師の自覚や自己発見をする場となることを期待して活動を開始したわけではなかった。看護師の自覚や自己発見を促すという事例検討会では、事例提供者の心理的負担も大きいと考え、このような目的ではなく、患者の理

解と看護計画の見直しをすることを目的として設定し活動してきた。

看護は患者を理解することから始まる。しかし一方で患者を完全に理解することはできないという限界もある。そのため看護師は、さまざまな視点から観察し、コミュニケーション技術を駆使して、人間関係を築き理解しようとしている。

患者を理解するのは、看護が患者の人生に関わる仕事であるためでもある。もちろん看護は健康の側面からのアプローチではあるが、健康がその人の人生に与える影響が大きい。精神の病は、その人の生活背景や生育歴が直接関連することも多く、その人を理解しなければ、どのように援助すれば良いのかを考えるのは難しい。その人を理解し、よりよい看護を提供するために先入観やさまざまな機制を排除して考えることが重要である。

### ・参加メンバー

開始当初は異なる職場に勤務する修士課程の学生3名と筆者で開始した。徐々に修士課程学生が勤務している県内の病院(山角病院)の看護師2名、精神看護の実践を希望する編入学生を含めた学部学生が加わっていった。またその学部学生が卒業した後は、修士課程の学生に加えて附属病院2階東病棟(精神神経科病棟)に勤務している卒業生、国立精神神経センター武蔵病院や国府台病院、国立療養所下総病院に就職した卒業生と徐々に人数が増えていった。これまでに事例を提供してくれたのは17名の修士課程学生、編入学生、卒業生、外部関係者等である。また事例を提供せずに参加したのは、学部学生、卒業生、助手などの職員で合計13名であった。参加者は合計30名であるが、延べ人数は246名であった。

参加は任意で強制しないようにしたが、事例提供が予定されている者は、欠席をしないように依頼した。各回で多少ばらつきがあるものの毎回10名前後が参加している。

## ・活動状況

開始したのは平成12年からで現在までに合計23回実施した。平成12年度は5回、平成13年度は10回、平成14年度6回、平成15年度はこれまでで2回実施した。1回につき、1～3事例が提供され討議した。活動時間は当初は午後の時間帯で行っていたが、参加メンバーの増加と共に、日勤者の参加も可能なように19時から22時くらいであった。時に深夜に及ぶこともあった。実施日数が不定期だった理由は、皆が無理をせず実施することが可能な日を各回の終わりに決めたためである。参加者が修士課程の学生よりも卒業生が多くなっていったことにより、日程の調整が難しくなっていったことによると考えている。また多くの精神看護実践者が集まるときに事例検討ではなく、修士課程の学生が計画や中間、最終発表の検討の場になることもあった。途中、定例会にするという意見もあったが、さまざまな制約があり任意とした。

提供するものは、事例提供者がよくわかっていることが条件である他、気になっている事例、あるいは受け持ちの事例で特に困っている事例とした。事例提供者が、独自の書式で事例の概要、現在実施されている看護計画、問題と感じているところについてサマリーを記載して提供する。この際、個人の特定ができないような記載をするよう努め、倫理的に配慮した。必要に応じて各所属長の確認を得た。

提供された事例がイメージできる程度の質疑の後、その対象者に最も望ましい看護について検討した。この討議をとおして参加メンバーがそれぞれが勤務する場では出会わない対象者を理解することができた。また、事例提供者は、それまでの固定観念でとらわれていたみかたから開放され、別の側面から対象者を考えたり、理解したりすることができた。さらに現在実施中の看護計画の問題点や、行き詰まっている状況を客観視することができた。今後、どのような看護を実施すればいいのか冷静に考えることができた。これは討議の場で、問題点の指摘にとどまらず、できるだけ今後の看護の方向が明確になるような意見を出し合うことができたためと考える。会の運営は修士課程の学生が行っていた。

## ・検討事例とその内容

参加したメンバーは必ず事例を提供するようにした。参加メンバーの勤務している病院の状況が異なるために、検討した事例の状態もさまざまである。検討事例は56事例(46.2 ± 19.83歳)である。女性は18歳から77歳までの26事例(48.5 ± 19.6歳)で、男性は12歳から78歳までの30事例(44.2 ± 20.13歳)である。事例の診断名は統合失調

表1 提供された事例

年齢(歳)	男性	女性	合計
	43.7±20.0	48.5±19.6	45.9±19.8
診断名			
統合失調症	12名	13名	25名
痴呆(等)	2名	5名	7名
うつ病(等)	2名	3名	5名
薬物等依存	3名		3名
摂食障害		3名	3名
知的障害	3名		3名
その他	9名	2名	11名
計	31名	26名	57名

症が最も多く24事例であった。次いで痴呆(脳血管性痴呆, 老年痴呆, アルツハイマーを含む)が6事例, うつ病(躁うつ病のうつ状態を含む)5事例, 摂食障害3事例, 薬物依存症3事例の順であった。提供された事例の状態で見ると、操作的などの問題行動をおこす知的障害や人格障害の事例も比較的多く認められた。また、身体疾患を合併した事例もいくつか提供された(表1)。

話し合った内容を振り返ると、提供された事例はどのような人物であったのかを詳細に理解するような質疑と応答をはじめに行った。また看護計画に至るアセスメントの内容を確認しあった。さらに現在実践されている看護や、その施設での実践の状況を確認した。その際、事例提供者がその時にどのような看護を実施したのか、その時の対象者の反応については深く追究しないように注意した。できる限り明日からの看護を変化させることができるようにすることを目指し、前向きで積極的な意見を述べあうように努めた。なかには、他の施設の学生あるいは卒業生から意見を言われたことで、事例を提供することに躊躇いを感じる事例提供者もみられたが、その後の話し合いで改善することができた。また各職場における機制や制約、現在実施されている看護を離れて、提供された事例のQOLを高めることのみを考えていたため、時に飛躍と思われるような看護計画も考え出された。このような看護計画を話し合うことにより、固定観念や枠をはめてみていたことに気づくメンバーもいた。職場においては、いかに看護師の枠や病棟の機制を多く受けていたことに気づくのである。

また、身体疾患を合併した事例の場合、編入学生や修士課程の学生のこれまでの学習や臨床での経験からアドバイスや看護計画修正案が提案されることもあった。さらに新しい薬物の使用状況や作用、副作用の確認を行うこともあった。これらの討議により新たな知識として相互に学習する機会になったのではないかと考える。

また、現在では、精神看護の将来や各職場の情報交換なども行っている。

### . 今後に向けて

事例を深く検討し、お互いの方見方や考え方を検討しあうことは非常に重要である。お互いのルールを決め、確認しあうことが重要であると思われた。また現在実施してきたような事例検討と、看護師としての自己を見つめるような事例検討が必要になるのではないかと思われた。自己を見つめるような事例検討の場合、その必要性を感じている者同士でグループを設け、相互に検討することが必要になると思われる。

いずれにしても同じ領域で看護を実践していく仲間として、施設は異なっても相互交流することや、看護の質を高めるための方法を討議することは意味があるのではないかと考えている。少なくとも筆者にとっては、大きな学びの場になったと実感している。

### . おわりに

精神看護学研究室が卒業生、修了生、学部学生、修士課程の学生、附属病院看護師の交流の場であり、相互に学習しあう環境であったことやお互いに1つの問題を共有できたことが、この活動が続いてきた理由ではなかったかと思う。

最後にこのケースカンファレンスのためだけに、年次休暇をとったり、遠いところから車でかけつけてくれた参加者の皆様に感謝します。